

今回から、アンテベラム期にブラジルへ渡航した2人目の宣教師、ジェームズ・クーリー・フレッチャー (James Cooley Fletcher) を取り上げる。彼は長老派 (プレスビテリアン) の宣教師として、1852年から1869年にかけて計5回ブラジルを訪れ、その旅の一部をダニエル・バリッシュ・キダーとともに *Brazil and the Brazilians: Portrayed in Historical and Descriptive Sketches* (1857年) としてまとめている。

同書は、「ブラジル性」「混血国民論」「インディオの習俗・神話」など、ブラジルの特殊性について論じている。加えて、それらの特殊性に接合されるポルトガル植民者の宗教や民族的特徴に着目するとともに、ブラジル社会の歴史や社会のあり方、そこで展開された経済活動についても詳細に論じている。さらに、当時の南米唯一の立憲君主国であったブラジルの政治的重要性にも目を向けており、フレッチャー自身も皇帝ドン・ペドロ2世 (在位: 1831～1889) と親交を深めた。そのため、彼は皇帝の「ニューイングランドの知友」の1人であったともいわれている⁽¹⁾。

すでに2025年10号で述べたように、*Brazil and the Brazilians* は、しばしばキダーの *Sketches of Residence and Travels in Brazil* (1845年) と並び、米国においてブラジルを紹介した最も古い書物の一つとして知られ、ブラジル学の先駆的著作として位置づけられている。フレッチャーは、宣教師としての役割を担いつつ、米国人とブラジル人との文化的差異を前提に、その両者を架橋する社会関係の構築を模索した。彼の試みは、宣教活動を進めるうえで、交渉のプロセスとして現地の「宗教文化」に照準を合わせることの重要性を示している。*Brazil and the Brazilians* には、こうした文化的な齟齬や緊張関係のなかに、ブラジル社会とその文化を理解するための重要な手掛かりが含まれているのである。

しかし、このようなフレッチャーの功績にもかかわらず、彼はキダーとは対照的に、ブラジルではあまり知られていない。ブラジル宗教史を専門とするブルーノ・ゴンサウヴェス・ホージ (Bruno Gonçalves Rosi) によれば、プロテスタント教会の歴史書やそれに関連する学術論文のみならず、2009年に開催されたブラジル長老派教会 (Igreja Presbiteriana do Brasil) の創立150周年記念式典においても、彼への言及はほとんど見られなかったという。そして、そのことを踏まえ、フレッチャーに関するより詳細な分析と発信の必要性を主張している。そうした観点から、本連載では彼に関する記述を通じて、多少なりともその「必要性」に応えたい。フレッチャーの生い立ちと家庭環境

まず、フレッチャーの生い立ちと家族について見ていくことにしよう。

彼は1823年4月15日、11人兄弟姉妹の長男として、米国インディアナ州インディアナポリスに生まれた。父はカルヴィン・フレッチャー、母はサラ・ヒルである。カルヴィンは州上院議員、弁護士、実業家、農場経営者として活動し、地元を代表する名士であった。1821年、カルヴィンとサラはインディアナポリスへ移住し、まもなくカルヴィンはマリオン郡の検察官に選出された。さらに1834年には州法銀行の理事および公債償還基金の委員に任命され、トーマス・シャープと共同で「フレッチャー・アンド・シャープ銀行」を設立するなど、カルヴィ

ンは地域の有力者としての地位を確立した。フレッチャーは、そのような恵まれた家庭環境のなかで育った。

カルヴィンは敬虔なメソジストであったが、「第一次大覚醒運動 (First Great Awakening)⁽³⁾」の影響を強く受け、教派の枠を超えてさまざまな教会や超教派団体の活動にも積極的に参加していた。とりわけ、そのリバイバル精神はフレッチャーや彼の兄弟姉妹にも大きな影響を与えた。実際、フレッチャーがのちに長老派の宣教師となったのとはほぼ同じ頃、弟のイライジャはメソジスト派の牧師となっている。

若きフレッチャーは、地元の学校を卒業したのち、東海岸のニューハンプシャー州へ移り住み、フィリップス・アカデミーを経て、ロードアイランド州のブラウン大学に進学した。その後、1847年、24歳で宣教師となることを決意し、プリンストン神学校 (Princeton Theological Seminary) に入学した。そこで、当時の代表的なカルヴァン主義神学者であったアーチボルド・アレクサンダー、サミュエル・ミラー、チャールズ・ホッジらに師事した。ヨーロッパ留学とブラジル派遣

1849年、フレッチャーはカリブ海のハイチでの宣教活動を志し、フランス語を習得するためヨーロッパへ渡った。パリとジュネーヴで学業を続け、とりわけジュネーヴでは、当時、米国でも宗教改革史研究によって令名を馳せていたジャン・アンリ・メルル・ドービニエのもとで学んだ。そこで彼は、キリスト教による教化、法・道徳・慣習による社会統制、さらには思弁的学問や論理など、西欧キリスト教文明を特徴づける諸要素について学び、その歴史的展開への理解を深めた。この経験は、のちに自然崇拜をはじめとするブラジル先住民の宗教文化を観察・考察する際の重要な視座となったと考えられている。

また、パリではフランスを代表する政治思想家アレクシス・ド・トクヴィルと面会したほか、同地で開催された国際平和会議 (International Peace Congress) には、ニューヨークの新聞 *Observer* の特派員として参加した。さらに、留学中にはジュネーヴのカルヴァン主義神学者セザール・マランの娘ヘンリエットと結婚し、1850年に夫妻で米国へ帰国した。

帰国後まもなく、フレッチャーはインディアナ州の長老派教会によって牧師に任命された。そして1851年、「内外キリスト教連合 (American and Foreign Christian Union)」ならびに「アメリカ水上友愛会 (American Seamen's Friend Society)」の命を受け、翌1852年にリオデジャネイロへ派遣された。その主なミッションは、同市に居住するアメリカ人や、リオデジャネイロ港に寄港するアメリカ船の船員に対する牧会活動であった。

[註]

(1) Bruno Gonçalves Rosi. "James Cooley Fletcher, o missionário amigo do Brasil". In: *Almanack*. Guarulhos, n.05, p. 63, 1º semestre de 2013.

(2) Ibid., p. 63.

(3) 「第一次大覚醒運動」は、1730～1740年代の英領北米植民地で展開された宗教復興運動である。個人の回心体験を重視し、教派の枠を超えた巡回伝道が活発化したことで、諸教派間の協力や超教派的志向が顕著となり、後のアメリカ・プロテスタントの発展に大きな影響を与えた。